

平成 22 年 5 月 21 日現在

研究種目：基盤研究（C）
 研究期間：2007～2009
 課題番号：19530573
 研究課題名（和文）解決志向アプローチによる地域における学校教育臨床支援システムの構築
 研究課題名（英文）The establishment of a community system of clinical and educational psychology supporting school education based on solution-focused approach
 研究代表者
 久能 弘道（KUNOU HIROMICHI）
 北海道教育大学・教育学部・教授
 研究者番号：30271703

研究成果の概要（和文）：第1回～第3回大会ソリューションランドを開催し、「解決構築（志向）アプローチ（SFA）の教育現場での実践（WOWW）」を3年間連続で発表し、日本全国にWOWWの理論と実践を紹介した。また、市内小学校における、解決構築（志向）アプローチを生かした学校教育実践（WOWW）を展開した。ハイパーQ-Uにより、その有効性を検証した。さらに、第1回学校教育実践に生かす解決構築アプローチ研究大会（WOWW 研究大会）を旭川で開催し、地域における学校教育臨床支援システムの構築に大きく貢献した。

研究成果の概要（英文）：We established a new association called “Solution-Land”, in which various methods of education were discussed in terms of solution-focused approach. We also conducted the WOWW (Working on What Works) at an elementary school. The results of Hyper Q-U test indicated that the WOWW approach was significantly effective. Besides we established another association called “WOWW research center” and held an annual WOWW meeting, for the first time in Japan, in Asahikawa. These studies have made a remarkable contribution to developing solution-focused education at school (WOWW program) in Japan.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	1,200,000	360,000	1,560,000
2008年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2009年度	1,100,000	330,000	1,430,000
年度			
年度			
総計	3,400,000	1,020,000	4,420,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：心理学・教育心理学

キーワード：解決構築（志向）アプローチ、WOWW 研究大会、ソリューションランド、学校教育臨床支援システム、特別支援教育、学級崩壊、ハイパーQ-U、地域

1. 研究開始当初の背景

本来、子どもにとって学校は新しいことを

学び、仲間と時間と場所を共有できる魅力的な場のはずである。残念ながら、近年の日本

の教育現場は必ずしもこのような場になっていないと思わせる現象がしばしば指摘されている。このような現状に鑑み、不登校、いじめ、非行、学級崩壊、自傷行為、意欲の減退といった学校不適應と年齢相応の発達課題を抱えた子どもたちとその保護者にとって、本当に役に立つ支援を創りたいという切なる願いが本研究のはじまりである。机上で考えるだけに留まらず、行動力と忍耐力をもって、地域において大学、教育現場、地域の子ども・保護者という3者の連携システムの先進的モデルを具現化した学校教育臨床支援システムを創始・発展させていくことが本研究の目的である。

筆者（研究代表者）はこれまでに地域で苦戦する子どもとその保護者のために実際に役に立つシステムを地域に創設していくことに精力的に取り組んできている。平成13年度から平成16年度の科学研究費補助金による研究において、はじめに、へき地・小規模校で不登校児童に対する有効な取り組みを実践している現場教員とともにへき地・小規模校での効用について、また学級において不登校児童への教育相談的関わりを模索している他の現場教員とともに構成的グループエンカウンターなどの有効性について、それぞれ実証的に研究を行った。つぎに、学校現場に教員とは異なる専門性をもつスクールカウンセラーによる地域での取り組みの現状と課題について考察を行った。さらに、教育臨床的支援を具体的に提供できるシステム作りと人材育成を目指して、地域における心理教育相談支援室を中心とする実践と研究を行いながら、教育相談（カウンセリング）とピアヘルピングにおける解決志向アプローチの有効性について考察を行ってきた。

2. 研究の目的

本応募研究の主目的は、これまでの筆者（研究代表者）の研究・実践成果を踏まえつつ、地域で苦戦する子どもとその保護者のために実際に役に立つシステムを地域においてさらに充実させていくことであるが、この主目的を達成するために以下の3点の下位目的を設定する。

第1点は、平成16年4月に創設した、地域における子どもと保護者に対する学校教育臨床支援システムの中核をなすべき旭川心理臨床・教育相談支援室の機能強化・向上をこれまでの経過と課題を踏まえつつ継続的に推し進めることである。解決志向アプローチのパラダイム・方法論による、相談員のさらなる力量の向上と組織としての運営のノウハウという知的価値の蓄積をさらにすすめる。

第2点は、平成15年度に養成を開始した、教育大の特色を生かした学部学生ピアヘルパーによる実践的学びを重視する有効な教員養成の実践と連動した、地域の子どもに対する支援のシステム作りと運営である。ピアヘルパー個人の力量をさらに高めるとともに、ピアヘルパーの機能的組織化、相談室組織とのさらに有機的な連携をすすめる。

第3点は、解決志向アプローチを基礎とするWOWWプログラムの導入、実践である。第1、2点がいわば学校教育現場の「外」で行われる支援であるのに対して、この第3点は学校教育現場の「内」で行われる支援である。学校現場での不適應、荒れという今日的課題に対して、高度な心理臨床的専門性を有する心理臨床・教育相談支援室相談員とそれと有機的に連携を図るピアヘルパーが学校現場へ入り込んでいき、現場教員と協働して児童生徒の健全な成長を支援するという地域全体での取り組みといえる。これら3点は主目的を達成するための連携のトライアングル

であって、それぞれが専門性を持ちつつ自立していながらも高度に連携しあって機能するものである。

本研究の特色・独創的な点は以下の3点である。(1) 従来の、医学モデルに基礎を置く旧来型の心理臨床モデルに立脚した学校教育臨床モデルを解決志向アプローチモデルに基礎を置く新しい心理臨床モデルに立脚した学校教育臨床モデルへのパラダイム及び方法論の転換を図っていること。(2) 心理臨床について高度な専門性をもって子ども・保護者を支援する心理教育相談支援室の相談員組織と BBS (Big Brothers and Sisters) 的関わりによって主に子どもに対する支援を行うピアヘルパー組織が緊密に連携を図り、協働して支援を行っていること。(3) 米国のごく一部地域においてはじめて導入がなされ、試行錯誤を経て改良が繰り返されている WOWW プログラムを日本で最初に導入し、地域の実情も勘案しつつ、改良・適用を図り、地域の子どもと保護者のために実際に役に立つ日本版 WOWW プログラムの開発を目指していること。

3. 研究の方法

計画の初年である平成19年度は、解決志向アプローチによる地域における学校教育臨床支援システムの構築のための基礎固め期間と位置づけ、次の3点を研究実践対象とする。

第1点は、平成16年4月に創設した、地域における子ども・保護者に対する学校教育臨床支援システムの中核をなすべき旭川心理臨床・教育相談支援室の機能強化・向上をこれまでの経過と課題を踏まえつつ継続的に推し進めることである。解決志向アプローチのパラダイム・方法論による、相談員のさらなる力量の向上と相談室組織としての運営のノウハウという知的価値の蓄積をさらにすすめる。支援の対象は、援助サービスの3

段階のレベル(石隈, 1999)のうち、将来的には、一部の子どもに対する二次的援助サービスとすべての子どもに対する一次的援助サービスの提供も視野に入れつつも、当面の目標になるのは特定の子どもを対象とする三次的援助サービスとする。すなわち、不登校・引きこもりなどによって、現在の地域における学校教育により提供される支援サービスを受容できていない状態にある児童生徒・保護者への支援と、現在の地域における学校教育による援助サービスではニーズが満たされない、あるいは学校が提供するサービスと自らが求めるニーズとの間にズレがあり苦戦を強いられている児童生徒・保護者への援助を中心とする。

具体的には、各学校、地域への広報活動を通じて、積極的に上述の心理教育的ニーズをもつ児童生徒とその保護者を募り、個別のニーズに応じて、旭川心理臨床・教育相談支援室において、相談員がカウンセリング・教育相談を実施し支援にあたる。また、カウンセリング・教育相談における面接場面は、相談者の了解を得た上で、施設に設置されている視聴覚記録機器を用いて記録し、後の分析に使用する。初級・中級相談員は、面接場面をこの装置を使って繰り返し振り返ったり、上級者の行う面接場面の視聴覚記録を繰り返し観察したり、自分の面接場面と比較をしたりして学習する機会を多くつくる。さらに、録音された面接を逐語に書き起こすことで、より学びを深め、その逐語を用いたスーパービジョン、事例検討等によって力量のさらなる向上を図る。

これら相談員の力量の向上の程度については、相談員自身の主観的な評価だけに留まらず、面接ごとのスーパーバイザーからの評価、さらにはクライアントである児童生徒及びその保護者から、調査票による回答を求め、

多角的視点から評価できるようにする。その際、クライアントにとって支援の何が実際に役に立ったかについてクライアントから、学び続ける謙虚な姿勢を大切にしたい。同時に、相談員のスキル向上のためにどんな指導が実際に役に立ったかについて学習者の視点からの回答を求め、相談員の育成方法について有効な方略を探ることとする。

また、初級から中級レベルへ、中級から上級レベルへ、相談員がどのような過程をとおして、解決志向アプローチの面接についての力量を上げていくのか、さらに、その過程でどのような教育、指導が役に立つのかについて考察をすすめる(たとえば、De Jong, 2005を参考に)。

第2点は、平成15年度に養成を開始した、教育大の特色を生かしたピアヘルパーによる実践的学びを重視する有効な教員養成の実践と連動した支援のシステム作りと運営である。BBS的立場から児童生徒への支援を担うピアヘルパー組織の拡大と質の向上、及び相談員とピアヘルパー連携の強化を図る。

具体的には、ピアヘルパーに対しては、スーパービジョン、事例検討会、相談員と合同による研修会を通して、ピアヘルパー個人の力量の向上を図るとともに、ピアヘルパーの組織内の相互連携・協力を強化することを促進する。相談員同様、ピアヘルパー自身による支援活動報告とその記録によって、個々のピアヘルパーの成長過程がわかるようにするとともに、スーパーバイザー、さらにクライアントである児童生徒とその保護者からの評価も調査票を用いて回答してもらい、客観的な指標とする。その際、クライアントにとって支援の何が実際に役に立ったかについて教えてもらいながら、学び続ける謙虚な姿勢をここでもやはり大切にしたい。

第3点は学校現場へのWOWWの導入の準備

調査及び調整を行うことである。学校現場への導入のためには現場の教員との事前の合同勉強会や情報交換会、研修会、検討会を重ねて相互の信頼関係を築くとともに、導入のために必要な準備、手順、方法などについて協議を重ねながら具体的に地道にすすめていくことが必要である。また現場教員の抱える課題についても調査研究を実施分析することによって必要とされているニーズについてもこの年度中にさらに明確にする。

4. 研究成果

平成19年度から21年度の3年間の研究の成果は、以下の3点が挙げられる。第1点目は、解決構築(志向)アプローチを主たるカウンセリング技法とする大学附属の心理教育相談室の活動を通じて、地域に開かれた心理臨床活動を展開する中で、相談員の技量の向上、相談室機能の充実とノウハウの蓄積をさらに進めることができた。相談員の多くは、地域の学校教職員であり、心理臨床と学校教育実践とをリンクする人材、組織を整備することに大きく貢献した。第2点目は、第1回～第3回大会ソリューションランドを企画、開催したことである。大会の中心メンバーの一人として、開催前から、企画・開催に関わるとともに、大会当日には、「解決構築(志向)アプローチ(SFA)の教育現場での実践」というタイトルでセッションを担当した。日本の各地において、学校教育実践にSFAを生かした取り組みについて、実践報告や様々な情報の交換を行い、また人と人との交流も生まれた。第3点目は、市内小学校における、様々な課題を抱えたクラスにおけるの現場の教員との協働による、解決構築(志向)アプローチを生かした学校教育実践(WOWWと呼ばれ

る)の展開である。学級崩壊したクラスに対する働きかけ方、特別支援教育のニーズをもった子どもへの対応、教職員に対する支援のあり方、保護者に対する教育相談的関わりのすべての側面において、SFAを生かした取り組みが試行され、大きな教育実践効果を上げるとともに、ハイパーQ-Uによる効果測定によって、このアプローチの有効性を検証することに役立ってきている。また、この学校教育臨床支援システムには、学生も関わり、ピアヘルパー的関わりの側面からも解決構築(志向)アプローチの応用を考える上で、非常に有効であった。なお、これらの実践(WOWW)は旭川において開催された第1回学校教育実践に生かす解決構築アプローチ研究大会(WOWW研究大会)に結実し、地域における学校教育臨床支援システムの構築に大きく貢献するとともに、旭川を日本におけるWOWWの理論と実践を先導する最先進地として広く認知されるに至らしめた。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[学会発表](計6件)

- ① 久能弘道 WOWWの実践報告, 第3回ソリューションランド, 2009年9月20日, フェストーネ(沖縄)
- ② 久能弘道, 解決構築アプローチの学校教育実践への応用(WOWW), 第21回日本学校教育相談学会研究大会, 2009年8月3日, 沖縄国際大学(沖縄)
- ③ 久能弘道, SFA 教育現場での実践, 第2回ソリューションランド, 2008年8月10日, メトロポリタンプラザ(東京)
- ④ 関山雅人・神田恵理・久能弘道, 解決志向アプローチの教育場面での応用(1)——附属学校におけるWOWWプログラムの導入と実践——, 北海道心理学会, 2007年10月7日, 北海道教育大学旭川校
- ⑤ 野崎徹・鳴川啓子・久能弘道, 解決志向アプローチの教育現場での応用(2)

——教育現場での教員による工夫と取り組み——, 北海道心理学会, 2007年10月7日, 北海道教育大学旭川校

- ⑥ 久能弘道, 解決志向と教育 WOWW の紹介 第1回ソリューションランド, 2007年7月15日, かでる2・7(札幌)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

久能 弘道 (KUNOU HIROMICHI)
北海道教育大学・教育学部・教授
研究者番号: 30271703

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし